

# フィリピンの価値育成のための教育

## — 中等教育における「価値教育」を事例として —

平久江 祐 司\*

### 1. はじめに

フィリピンでは1986年2月革命が起こりアキノ政権が成立した。この政権の成立は強権的政策により経済的発展をはかる開発独裁の終焉と多民族国家における「ピープルズパワー」の爆発という点で劇的なものであった。そして、この革命の帰趨は冷戦下の勢力均衡に多大な影響をもつものとして世界の注目を集めることとなった。こうした状況の中で、アキノ政権は国民としての共通の価値観の育成をはかるために、1989年から中等教育において価値教育 (values education) を実施している。価値教育は教科目としての「価値教育」によって行われると同時に全教科の中で展開されるものとされている。教科目としての「価値教育」は、中等学校の4年間にわたって全生徒が毎日学習する教科となっている。この価値教育は新しいフィリピン国民の育成に大きな貢献することが期待されている。

フィリピンの教育制度<sup>(1)</sup>は、7歳から12歳の6年制初等教育と13歳から16歳の4年制中等教育(普通科、職業科、技術科)と17歳からの高等教育からなっている。1989年現在、初等教育の在籍者は約1030万人、中等教育の在籍者は約400万人、高等教育在籍者は約130万人となっている。公立初等教育における入学率の全国平均(対7歳人口)は、1980年代初頭に約93.1%、初等学校入学者の中等学校への進学率は約54%に達している。中等学校の構成は、中等学校の学校総数が5430校で、そのうち約62%が公立学校、約38%が私立学校で中等学校生徒総数に対して約60%が公立学校、約40%が私立学校となっている。<sup>(2)</sup> フィリピンにおいては、初等から中等、高等教育へ進むに従って私立学校への依存は高くなっている。フィリピンの教育は総体的にみると増加する生徒数と教育予算の不足や、都市部と農村部の教育環境の著しい格差など深刻な状況にある。こうした状況にもかかわらず、アキノ政権は真の民主主義社会の建設に必要な国民の育成のために教育の果たす役割を重視し、1988年公立中等教育無償法 (Free Public Secondary Act of 1988)<sup>(3)</sup> を成立させ、初等教育から中等教育へ無償の枠を拡大するなどの改革を行っている。

フィリピンでは植民地時代以降カトリック教が国民的宗教として定着してきた。また、マルコス時代以降「二言語政策」が続けられ、国語としてのピリピノの識字率も高まってきている。こうした点からフィリピンの国民的統合の基盤はある程度形成されて来ているといえる。フィリピンが国民的統合をさらに推し進めていくためには、国民としての共通の価値観の育成が主要な課題となってくるものと思われる。アキノ政権がこうした課題の克服に大きな期待を寄せている価値教育は、今後のフィリピンの教育を考える上で重要な鍵になってくるであろう。そこで、本論文ではアキノ政権が価値教育を通してどのような価値を育成していこうとしているかについて考

\* 図書館情報大学大学院修士課程・私立高等学校講師

察していくことにする。

## 2. 価値教育を考える視点

フィリピンの価値教育は、伝統的に道徳教育または人格教育として行われてきた。道徳教育／人格教育は、初等レベルにおいては時間割の中で設定されていたが、中等教育レベルでは各教科の中に統合されていた。<sup>(4)</sup> こうした道徳教育／人格教育は「1989年中等教育カリキュラム」成立以降、価値教育に引き継がれていくことになる。この中等教育カリキュラムでは「価値教育」を独立した教科として設定したことが改革の重要な柱として掲げられているが、それは「社会の緊急の要求」に答えるためのものであるとしている。したがって「価値教育」は、伝統的な道徳／人格教育の流れを受け継ぐ側面と「社会の緊急の要求に答える」側面を持った教科であるといえる。こうした点から価値教育の性格を考察する場合は、「社会の緊急の要求」とは何かというフィリピン社会が直面する諸問題との関連の中でとらえる必要がある。アキノ政権下のフィリピンが抱える最大の「社会の緊急の要求」とはどのようなものであろうか。強力な独裁体制という蓋が取り除かれたフィリピンでは、国内の民族間の較差や対立という問題が新たな高まりを見せ、社会の大きな不安定要素と成っている。そのためこうした問題を克服し、国民的統合を押し進めることがフィリピンの主要な問題となる。多民族国家<sup>(5)</sup>における国民的統合は単一民族によって構成される国家とは異なる側面を持っている。一つは国内の諸民族が社会の主要な制度へ参加していく側面ともう一つはこうした民族の文化的変容の側面である。価値教育の問題としては、後者の側面がより大きな問題となってくると考えられる。

また、価値教育は、学校教育の一環として行われる教育である。学校教育における価値教育の性格を考える上で有効な枠組みを提示してくれるのがタイの道徳教育を分析した岩崎文吉の論点である。岩崎は学校教育において育成される価値体系は「当為として公認された規範的価値」と「個人的要求や関心の反映としての操作的価値」という2つの側面から考察されるとする。<sup>(6)</sup> 「操作的価値」は「教師や父母や生徒自身において要求されている現実的要求としての価値体系」で現地での密度の高い調査によって明らかにされるものである。「規範的価値」は「学校側や当局者が意図的に設定し道導している公に是認された規範としての価値体系」であり、学校教育で公認された教科書等の調査によって明らかにされるものである。そして「規範的価値」は、経済発展を至上命題とし同時に固有の伝統的文化をもつ東南アジアの国々においては「伝統的宗教的価値体系」と「近代化と経済発展のための新しい世俗的価値体系」によって構造づけられるとしている。<sup>(7)</sup> アキノ政権が価値教育を通してどのような価値を育成していこうとしているかという問題は、「学校側や当局者が意図的に設定し道導している公に是認された規範」に関する研究として位置づけることができる。したがって、「価値教育」教科書分析が「価値教育」の性格を考える上で有効な方法であると考えられる。また、「価値教育」教科書分析において「伝統的宗教的価値体系」と「近代化と経済発展のための新しい世俗的価値体系」がどのような構造を持つかという視点は、経済開発を優先したマルコス政権下で生じた矛盾を抱えるフィリピンにおける価値教育を考察する上でも有効であろうと考える。しかし同時に価値教育が育成しようとしている価値は、それを構成する価値の内容からだけ見るのではなく、それらの価値がどのように生徒

に教授されるかということも重要な視点となってくる。

以上のことから価値教育を考察する視点として以下の3点を設定した。

- ①価値教育は「文化的同化」を志向したものであるか、「文化的多元主義」を志向したものであるか<sup>(8)</sup>
- ②価値教育において「伝統的価値体系」と「経済発展的価値体系」にどのような位置づけがなされているか
- ③価値教育においてどのような教授法が重視されているか

これらの視点に留意して価値教育の考察を進めていくことにする。

### 3. 「新社会」への教育改革から「ピープルズパワー」による教育改革

まず、アキノ政権の教育改革の特徴を明確にするためにマルコス政権下で行われた教育改革の特徴について若干述べておく。マルコスは1965年大統領に就任し、「国の偉大性の回復」をスローガンとして掲げ、社会経済の変革と国益優先の対外政策を実行していった。マルコス大統領は1972年9月戒厳令を布告し独裁的権力を手にいれ、1986年の2月革命によって失脚するまで21年間にわたりフィリピンの政権を握る。このマルコス時代は、フィリピンの国家統合過程において画期をなす時代といえる。1972年の戒厳令以降、マルコスは「新社会」(New Society)建設をスローガンに掲げ、新しい国家意識のもと種々の改革を実施していった。教育においてもその改革は実行されていった。マルコス政権下で行われた「新社会」のための教育改革が教育カリキュラム与えた特徴は以下のようなものであった。<sup>(9)</sup>

「カリキュラムは、道徳的価値、特に、規律、正直、社会的責任、儉約、ハードワーク、服従などの価値の発展に重要性を置くように方向づけされている。全ての学習状況は道徳的倫理的価値に重点を置き、市民としての義務と責任は強調されている。教育と生活の統合の手段として、全ての学年における教科の内容は、時勢や国民や国家の現実の必要に関連づけられている。経済的發展が大きな国家的目標であることを考慮し、全ての学校活動は仕事志向や生産志向であるべきであるとされている。」

これらの指摘から、「新社会」に必要とされる「道徳的価値」の内容は、国家目標の実現を重視し経済発展のための価値体系を優先したものとなっていたと見ることができる。こうした「新社会」のための教育が現実にはどのような成果をもたらしたかを測定することは非常に困難なものである。しかし、これについては「新社会」の教育についてナショナルアイデンティティの育成の観点から教育を分析したドロニラの研究が参考になると思われる。そこではフィリピンの教科書分析が行われ、それをもとに「新社会」の教育の問題点を明らかにしている。その中で以下のような指摘をしている。<sup>(10)</sup>

「ナショナルアイデンティティを文化的に象徴するものが強調され、歴史的な、より個人的なものは、あまり強調されていない。一般化された国家に対する誇りのようなものが強調され、国民としての個人のアイデンティティは比較的強調されていない。これは、結果的に国家にたいする抽象的な誇りを与えるだけである。」

マルコス政権下で行われた「新社会」のための教育に対するドロニラのこうした指摘は、マル

コス政権下で行われた教育の実態がどの様なものであったのかということを的確に指摘しているといえる。それはマルコス政権の教育政策の実態が国家的統合の強化を目指したものであったが、それは国民的統合へつながっていなかったことを示している。

アキノ政権は、1986年二月革命によって成立した。この革命を成功させた原動力は、民衆の力であった。こうした民衆の力は国民に自らの力に対する大きな自信と、国民としての強い自覚と団結を生み出すことになった。こうした民衆の力は「ピープルズ・パワー」と呼ばれ、その後のアキノ政権の政策に大きな影響を与えるものとなった。その影響は教育政策においては「変化は1986年の平和的革命によって生じた。真の自由と民主主義にたいする新しい期待や、市民が社会の変革や国家の建設に参加する機会の出現は、価値や国民の態度や行動にそれ相応の再評価を要求している。」<sup>(11)</sup>という表現の中にみることができる。

二月革命後の1987年に新憲法が制定される。その憲法の特徴についてみると、第14条「教育、科学技術、芸術、文化、スポーツ」の3項(2)では「教育制度は、愛国心とナショナリズムを教え、人類愛を育て、人権を尊重し、国家の発展の歴史の中の国民的英雄の役割を賞賛し、市民としての権利と義務を教え、倫理的、精神的な価値を強化し、道徳的品格や自己規律を進展させ、批判的創造的思考を奨励し、科学的技術的知識を広め、職業的効率を高めなければならない。」としている。この条文は1973年憲法の第15条の(4)の文言と比較した場合、「ナショナリズム」「人類愛」「人権尊重」「国民的英雄の役割」「市民としての権利」「倫理的価値」

「精神的価値」「批判的創造的価値」が新しく付け加えられているが、経済発展に関する価値は含まれていない。文化や芸術的価値に関する規定は、同じく14条の14項から18項の中で規定されているが、14項では「多様性の中の統一」に基づく国民的文化の振興に関して規定し、17項では「国家は、土着の文化的コミュニティの文化や伝統や制度を進展させるために彼らの権利を認め、尊重し、保護し、国家はこれらの権利を国家の計画や政策の形成過程で考慮していく。」とマイノリティの権利を保障している。こうしたアキノ政権のマイノリティに対する新たな姿勢は、フィリピンの国民的統一に向けての現実的な対応とみることができる。また家族について15条の1項では、「国家は、フィリピンの家族を国の基礎であると認識する。」として社会の中核と位置づけている。こうした「家族」制度の重視はフィリピン社会の伝統に基づくものでもある。フィリピンでは伝統的に大家族制をとり、大家族制度はフィリピン人にとって忠誠と帰属意識を最大限にむけるところであった。フィリピンの伝統的社会はこうした家族制度やコミュニティにおける相互扶助的人間関係を基礎に成り立っていたといえる。<sup>(12)</sup>

これらのことからマルコス政権下で行われた教育改革とアキノ政権下で行われた教育改革について比較すれば、「マルコス政権下においては国家的目標として提示された経済発展的価値体系が重視されている」のに対し、「アキノ政権下で行われた教育改革においては、個人の変革を重視し、家族や地域文化を尊重する社会的倫理を育成していくことによって社会変革を進めていこうとする方向へ変化してきている」といえるであろう。

#### 4. 価値教育のガイドライン

価値教育が、初めて教育課程の中に取り入れられたのはマルコス時代の1983年新初等教育カリ

キュラムにおいてである。このカリキュラムと中等教育カリキュラムに継続性をもたせるために「中等教育発展プログラム (Secondary Education Development Program)」がスタートし、1989年中等教育カリキュラムが策定された。この新中等教育カリキュラムは、1985年からの試行期間を経て1989年全国で実施された。このカリキュラムのもとで行われた価値教育は「二月革命」や新政権の成立により大きな影響を受けることになった。1986年には新政権のもと価値教育のための作業部会が文部省に設置され「価値教育フレームワーク」の草案が策定され、1988年省令No.6 (価値教育プログラム)として発効し、この「価値教育フレームワーク」が価値教育発展のためのガイドラインとなった。「価値教育フレームワーク」は、実施面で地域・地区・学校レベルにかなりの裁量の自由を認めている。

価値教育フレームワークの目的は、「「公正で人道的社会」と自立した民主的國家の建設に貢献する人間を育成していくこと」にあるとされ、以下の目標を設定している。

- 1) 自己を実現し、人間の尊厳意識にめざめ、全人的に発展する
- 2) コミュニティや環境に責任を持った社会的存在となる
- 3) 家族や國家の経済的安定や発展に貢献する生産的人間となる
- 4) 市民として、深いナショナリズムへの意識を持ち、グローバルな団結を通して国際社会全体や國家の進歩に貢献する
- 5) 現実の生活の中で、精神的な存在の反映としての神への永遠の信仰を明らかにする

こうした目標のために必要とされる価値は、「価値地図」(The Values Map)として提示されている。「価値地図」は「中心価値」(core values)と「関連する価値」(related values)によって構成されている。<sup>(13)</sup>これらの価値は「教育の過程で内面化されなければならない理念をリストしたもの」で、人間の持つ価値の「完全なリスト」ではないとし、地域・地区・学校のそれぞれのレベルで優先順位を決め「自身の価値地図を作っていく」べきであるとしている。

「価値教育」の教授について「価値教育フレームワーク」は「価値教育」が従来とは異なる新しい方法がとられるべきことを強調している。そこでは「価値は押しつけられない」とし、それは画一的な「教授—学習」過程ではなく、社会や自然環境や自己の成長との関連をもった「経験的な過程」によって形成されるとしている。「価値教育」が現実の学校の授業においてどのように行われているかを示す資料がある。それは「価値教育」の担当教師のための研修会の資料 (guide lines for values level teaching) <sup>(14)</sup>である。その中では指導上の留意点として以下のような点が強調されている。

- 受容的で断定的でない
- 多様性を奨励する；他の人の価値の問題に対する答えは、絶対的に正しい、あるいは絶対的に間違った答えはないことを納得する
- 参加するかしないかの個人の選択を尊重する
- 個人の反応を尊重する
- 誠実に答えようとするそれぞれの人を励ます
- 聞きそして生徒が価値を明瞭にするような質問をする
- 脅かしたり、考えを限定するような質問を避ける

—個人的、社会的関心の両面の質問をする

これらの教授に関する留意点は、フィリピンの教育において伝統的な権威主義とは明確に異なるもので、従来の教師の固定観念を打ち破ることを教師に迫るものとなっている。

## 5. 「価値教育」教科書の分析

この分析で使用する「価値教育」教科書は、文部省の検定教科書でフェニックス社によって出版され、私立高校において最も多く採択されているシリーズである。<sup>(15)</sup>

### (1) 「価値教育」教科書の構成

開発し育てていかなければならない人間関係として4つの柱を掲げている。

1) 自己との関係 2) 他者との関係 3) コミュニティ（人々とすべての他の生き物）との関係 4) 神との関係

各学年の「価値教育」教科書は、これらを柱とした4つの章によって構成されている。各章は、1節を1授業時間（40分）とし、8～10程度の節によって構成されている。教科書の各節では、授業展開の方法が提示されている。こうした授業の多くは、グループ学習やグループ討議やクラス討議によって進められていくようになっている。教科書による授業方法の提示は「価値教育」の専門教員の不足から生じる地域較差への配慮であろう。

### (2) 「価値教育」教科書の記述分析

1年から4年生用の教科書の記述から「価値教育」教科書の特徴をまとめてみる。1年生の第1章の「章のまとめ」では、価値を「全ての人の価値が同じというわけではない。」とし、また自分自身にとっても価値は、「大人になるに従って、価値の選択や再選択、順位づけや再順位づけをする。」として価値を相対的なものとしてとらえている。1年生1章5節で価値について以下のように記述している。

「ラス（RATHS E. Louis）（1966）によると真の価値は、以下の7つのすべての基準を満たしている。

I 選択すること（選択肢が考慮されている、結果が考慮されている、自由に選択すること）

II 誇りにすること（誇りにし、大切にすること、公に明言されている）

III 行うこと（実行する、一貫して、繰り返し実行する）

7つの基準をすべて満たしていない価値は、ただの価値の指標であって真に完全な価値ではない。」

ここで挙げられているラス（RATHS E. Louis）は、アメリカの道徳教育の有力な理論の一つである「価値明確化」理論の理論家である。「価値明確化」の理論は「価値づけ」（valuing）を重視する立場をとっている。それは、「人間は選択し、尊重し、行動するという知的な過程によって価値に到達することができる」というものである。この理論の特徴は、価値は普遍的・絶対的なものではなく、相対的なものとしてとらえられるところにある。<sup>(16)</sup> 「価値教育」教科書では、価値を相対的なものであるとする立場から、知識の記憶が主な目的となっている他の教科とは異なり、コミュニケーションの実践、たとえば、尋ねたり、交渉したり、協力したり、社会的な行動をしたりする経験を重視する。このアプローチは、価値について発見し、自身の価値を試し、

価値矛盾に応じて、価値の位置づけをするのに必要な事実や意見や考えを集める機会を提供するとしている。

また、「価値教育」教科書の「民族」の記述についてみると、1年から4年生用の「価値教育」教科書では7つの節が「民族」をテーマとしている。その中の5つの節で「フィリピン」の伝統的習慣に基づく同質性が強調され、その基盤を提供する「家族」の大切さが学習の重点とされている。また2つの節で民族のもつ差異について記述され、少数民族固有の文化の尊重とその共存が学習の重点とされている。後者の記述例としては憲法14条17項の「地域的文化的コミュニティの権利」の条文が引用され、その意義を生徒に質問し「多様性に対する寛容さ」の大切さを強調しているなどの例があげられる。ここにみられる視点は文化的多元主義の視点である。量的には僅かなものであるが、こうした視点が取り入れられたことは「価値教育」教科書の重要な特徴であると考えられる。

### (3) 「価値教育」教科書の定量分析

1年から4年生用の「価値教育」教科書の各節の「まとめ」の記述を対象として、その中でどのような価値が重視されているか調べることにした。その方法は「価値地図」によって提示された「中心的価値」とそれに「関連する価値」を1つの価値体系として、それらの価値が教科書記述の中にどれぐらい出現するかその回数を調べる方法をとった。また、それに併せてこれらの価値に関連の深いと思われる語句を選びその出現回数も調べてみた。2つの調査結果を出現回数順に並べてみると、以下のような表となる。

表：中心概念と中心価値体系の出現回数からの順位表

順位	関連の深い語句	回数	「中心価値」の体系	回数
1	家族 (family)	7 2	愛 (LOVE)	5 9
2	仲間 (GROUP)	7 1	社会的責任 (SOCIAL RESPONS.)	5 3
3	自己 (self)	6 7	効率性 (EFFICIENCY)	3 5
4	フィリピン人 (Filipino)	6 4	精神性 (SPIRITUALITY)	2 9
5	神 (god)	6 2	真実 (TRUTH)	2 6
6	コミュニティ (community)	5 8	ナショナリズム (NATIONALISM)	1 5
7	発展 (development)	3 6	健康 (HEALTH)	6
8	社会 (society)	2 8	*	*
9	友人 (friend)	1 9	*	*

これらの結果から以下の点が指摘できる。

- ①「愛」の価値体系の出現回数が最も多いが、その出現パターンをみると「神」という語句との関連が深いことがわかる。
- ②「ナショナリズム」の価値体系の出現回数が比較的少ない。
- ③「社会的責任」の価値体系の出現回数が多い。また、それに関連の深い「家族」「仲間」「コミュニティ」などの語句の出現回数が多い。
- ④経済発展に関連する「効率性」の価値体系は第三位という比較的低い位置にある。

これらの分析から、価値教育は「家族」や「コミュニティ」集団である「仲間」としての人間関係とその人間関係を構築する「社会的責任」や「愛」の価値の育成を重視していることがわかる。これらの価値はフィリピンの伝統的価値を構成してきたもので、「価値教育」ではこの伝統的価値によって生み出される「フィリピン人」としての同質性の育成を重視していることがわかる。

## 6. おわりに

これまでの考察から次のような点が明らかになった。フィリピンの経済的発展はアキノ政権においても依然として重要な課題であるといえるが、アキノ政権の教育改革の特徴は伝統的・宗教的価値の育成を重視するものである。これはマルコス政権下の教育改革が経済発展的価値の育成を重視していたことと比べると新しい方向をもつものである。こうした新しい方向はアキノ政権の教育改革の中心的教科とされた「価値教育」に明瞭に現れている。「価値教育」が育成する価値は伝統的・宗教的価値は「価値教育」教科書の分析から「家族」「信仰」に関する価値によって構成されることが明らかになった。「家族」「信仰」に関する価値はフィリピン社会に普遍的な価値とされてきたものである。「価値教育」教科書がこうした価値を中心に構成されていることは「価値教育」がフィリピン人の同質性を重視するものであり、文化的同化の側面を強くもつものであるといえる。

しかし、「価値教育」教科書に民族間の文化的差異を尊重する文化的多元主義の視点が若干であるにせよ取り入れられたことは多民族国家フィリピンの国民的統合を考える上で重要な点であると考えられる。また、「価値教育」教科書は価値について生徒個々が「自由に選択し」「大切にし」、「実践する」ことにより「真の価値」が獲得されるとしている。この「価値づけ」の重視は価値が相対的なものであるとする考え方にもとづくものである。これは相互の価値観の尊重によって成り立つものであり、結果として「多様性の中の統一」に寄与するものと考えられる。こうした点から「価値教育」は単に文化的同化を志向するものではなく、その内に文化的多元主義の観点にたつ新しい方向性をもつものであると考える。

「価値教育」のもう一つの意義は、「価値教育」の教授法がフィリピンの伝統的な教授法に大きな変革をもたらす可能性をもつことである。フィリピンの伝統的な教授法は、スペイン統治下のカテキズム学校以来の権威主義的な教授法の影響を強く残している。しかし、「価値教育」の教授法では個々の生徒の判断を重視し、授業がクラスやグループ内での討議を中心に進められていくことになる。これは必然的に教師の権威主義的態度を排除していくものであり、「価値教育」の新しい理念や教授法はフィリピンの教育に大きなインパクトをもつものと考えられる。



フィリピンの「価値教育」の研究を通していえることは、「価値教育」はフィリピンにおいてまだその緒についたばかりであり、「価値教育」を担当する教員の育成など多くの問題を抱えている。また、「価値教育」がフィリピンの教育にどのような成果をもたらすかについても今後の動向をみていかなければその成否を問えないものであるが、「価値教育」は新しい可能性をもつ教科であると思われる。それは「価値教育」が国内に多くの民族を抱えるフィリピンや東南アジアの国々の国民的統合に対する教育のあり方の一つの方向を提示するものであると考えるからである。先に提示した「価値教育」を考察する3つの視点は、国民的統合のための教育としての「価値教育」の方向性を明らかにしようとする試みである。

### < 註 >

- (1) フィリピンの教育に関する日本語文献は比較的少ない。これらの文献の多くは植民地時代の教育を対象としたものである。植民地時代から現代までの教育を取り扱っている基本的な日本語文献としては、『現代アジアの教育—その伝統と革新』（東信堂1989）が挙げられる。この文献の巻末には簡単な参考文献集があり基本的な日本語文献と英語文献があげられている。また、文部省の『教育調査』シリーズの『フィリピンの教育』（1985）は植民地時代から1985年までの学校教育に関して網羅的に取りあげている。アキノ政権以後の教育政策を扱ったものとしては、渋谷英章の「アキノ政権の教育政策—中等教育改革プログラムの検討を中心として」（1989）が挙げられる。また、アキノ政権の教育改革について詳しい英語文献としては、Minda C. Sutaria, Junita S. Guerrero Paulina M. Castano "PHILIPPINE EDUCATION: Visions and Perspectives" National book store, inc. 1989 が挙げられる。フィリピン教育に関する最近の教育調査としては、国立教育研究所国際教育協力室の「アジア・太平洋地域諸国の中等教育—いくつかの主要な側面についての比較研究」（1991）、研究代表杉山明男による「東南アジア地域の義務教育・教科用図書に関する比較研究」（1990）などが挙げられる。
- (2) ここに挙げたデータは文部省『フィリピンの教育』昭和60年から引用したものである。
- (3) この法律では授業料のほかに修了試験、実験室、図書室、医療、体育、軍事教練に要する費用は生徒が負担しないとされている。（渋谷英章「アキノ政権の教育政策—中等教育改革プログラムの検討を中心として」『江戸川女子短期大学紀要』No51990 P49 参照）
- (4) 原喜美 「フィリピンの国民的統一と宗教・道徳教育」『第三世界における国民統一と宗宗教・徳教育』（第三世界教育研究報告書）筑波大学教育学系比較教育研究室 1987 P. 51
- (5) フィリピンの民族構成は、極めて複雑な構成をもっている。フィリピンの諸民族は言語的には、8大言語、すなわちセブ語、タガログ語、イロカノ語、パナイーヒリガイノン語、ビコール語、サマルーレイテ語、カパンパンガ語、パンガシナン語があり、これらのいずれかを母語とする民族が大多数を占めている。しかし、言語的・文化的グループに分けると少数民族が約60、多数民族を合わせると全体で約80以上のグループに分かれている。

- (6) 岩崎文吉「教科書分析を通してみたタイ国学校における道德教育—その方法論的考察」  
『比較教育文化研究施設紀要』19号 1967 PP.68-69
- (7) 前掲書 P.82
- (8) 文化的変容は文化の共有が進み、考え方、感じ方、振る舞い方が互いに似てくることであるが、その統合過程のあり方の相違により「文化的同化主義」「文化的多元主義」の考え方がある。前者は少数民族の文化の支配文化への吸収・統合を志向するものであるのに対し、後者は構造的同化は必要であるとしつつも、民族固有の文化の保持存続を志向するものである。(小林哲也・江淵公一編『多文化教育の比較研究』九州大学出版会 1985 PP.11-14参照)
- (9) Tomas Q. D. Andres & Felizard Y. Francisco, "Curriculum development in the Philippine Setting" National Book store Inc. 1989 PP.28-29
- (10) Maria L. C. Doronila, "The Limits of Educational Change" University of the Philippines Press PP.130-131からの引用である。ドロニラが行った教科書分析の概要は、フィリピンの教育の中でナショナルアイデンティティの概念が、どのように教授されているかを明らかにするため、ナショナルアイデンティティの評価のための指標を作成し、その指標をもとに初等教育の3種類の教科書の内容分析を行った。評価のための指標として4つの主要なカテゴリーが設定され、さらにそれは、16のサブカテゴリーに分けられる。そして教科書の記述内容は、一事項ごとに上記の16項目のいずれに該当するか分類し、さらにそれらが、フィリピン国家にとって「好ましい」、「どちらでもない」、「好ましくない」のいずれに該当しているか判定し、その頻度を累計していくという方法によって分析をすすめていった。測定の正確さをきするため、2つのグループによって同様の分析をおこない。それぞれのグループが測定した結果の平均を最終的な調査結果として用いている。
- (11) 価値教育フレームワークの序文より引用 (The Values Education Program of the Department of Education, Culture and Sports, VALUES EDUCATION FOR THE FILIPINO, the Department of Education, Culture and Sports 1988)
- (12) 高橋彰「フィリピンの価値体系」『東南アジアの価値体系4』現代アジア出版会 1972 P.159
- (13) 「価値地図」では、人間の価値は「人間の尊厳」(human dignity)によって統一され、この「人間の尊厳」は8つの「中心的価値」(core values)と「中心的価値」にそれに「関連する価値」(related values)によって構成されるとしている。それは、A. 健康(肉体の健全さ、清潔、物質的な世界との調和、美、芸術) B. 真実(知識、創造的かつ批判的思考) C. 愛(誠実/正直、価値観/自尊心、自己規律) D. 精神性(神への信仰) E. 社会的責任(家族-相互の愛/尊厳・忠誠・親としての責務、社会-他者への関心・共通の善・自由/平等・社会的正義/人権尊重・平和/積極的非暴力・大衆参加) F. 経済効率(儉約/資源の保護、職業倫理、自立、生産性、科学・技術に関する知識、職業効率、企業家精神) G. ナショナリズム(共通のアイデンティティ、国家的統合、国民的

英雄の評価、献身、市民意識／誇り、バヤニヤン／団結、国への忠誠) H世界の団結 (国際理解と協調) によって構成されている。

- (14) この「guidelines for values level teaching」この資料は、現地の価値教育担当の公立高校の現職教員から入手したもので、価値教育の研修会資料として使われたものであることである。
- (15) VALUES EDUCATION, PHENIX PUBLISHING HOUSE SERIES I-IV、1988
- (16) 「価値明確化の理論」については、ラス L.E.、ハミシ M.、サイモン S.B. 著 遠藤昭彦監訳 『道徳教育の革新』 ぎょうせい 1991年に拠る。